

待つ人の今も来たらばいかげむ踏ままくをしき庭の雪かな

和泉式部

『詞花和歌集』巻四「恋」の一首。

「わたしの待つあの人は今もし来たらどうしよう。踏むのがもつたいないほどの庭の雪だわ」

『詞花和歌集』では、「題知らず」の詞書をもつて「恋」の部に収載される一首。和泉式部の作品群のなかでは比較的地味な歌であるが、読むほどに気にかかる。これは本当に「わたしの待つあの人」への「恋」の歌なのかどうか。

『和泉式部統集』には、「冬頃、荒れたる家にひとりながめて、またるる事のなかりしままに、いひあつめたる」との詞書とともに、十題歌の「庭雪」としてこの歌が見える。すると、「あの人」を待つ歌ではなく、「ひとりながめて」という式部の得意なつれづれなる物思いのひととき、だれというわけでもない、幻想(あるいは妄想)の恋人を待つ歌ということになる。そうでしょうと。



『和泉式部統集』は、女性歌人の歌が脚光を浴びる『後拾遺和歌集』(一〇八六)に先立つ他撰の集と思われる。

『詞花和歌集』収載時にもこの詞書から「題知らず」になったのは、なぜなんだろう。

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人あまくだり来むものならなくに  
『玉葉和歌集』

よく知られたこの一首も、恋の歌と読んでもいいし、哀悼の歌と読んでもいい。人生の物思いや憂愁の歌であつてもいい。つまりは、孤独の歌なのだから。

恋しても恋しても満たされない、生きてても生きてても充足しない、底知れぬ孤独感。和泉式部の歌の凄みは、「あまくだり来む」だれかを待ちながら、みずからの魂こそが抜け出してしまふように「空ぞ見らるる」(おのずから空を見つてしまふ)ところにあるのではないか。しかしそれはきわめて新しい、式部自身にすらはつきりとは自覚されない感覚だったのかもしれない。

歌をどう読みたいかということもまた、歴史のなかで動いてゆくのだ。  
(小島ゆかり)